

Game Changer プロジェクト ～パラスポーツで社会を変える～ 第2回来日プログラム実施報告

1 来日講師

リタ・ファン・ドリエル氏（オランダオリンピック委員会・スポーツ連合パラスポーツプログラムマネージャー、国際パラリンピック委員会理事）

ゲルト・ヤン・スケップ選手（陸上選手）

ヘレーン・ムース氏（オランダオリンピック委員会・スポーツ連合、パラスポーツエキスパート）

2 事業概要

事業名	来日プログラム パラアスリート交流授業
日時	令和元年 11 月 18 日（月）午前9時45分から午後5時30分まで
場所	文華女子高等学校、田無工業高等学校、ひばりが丘児童センター
目的	<ul style="list-style-type: none"> ・オランダにおけるパラアスリートのスポーツ環境を知り、西東京市におけるスポーツを通じた交流環境について考える。 ・パラスポーツ交流を通して、障害や障害者への理解促進を図る。
概要	<p>◆講演（文華女子高校、田無工業高校）</p> <p>脳性まひの影響で、手は常に力が入ったように曲がっていて、けいれんもあるゲルト・ヤン選手は、字を書くことも、身体のバランスをとることも難しい状態であった。周りの人に無理だと言われても、サッカー、水泳、陸上などのスポーツをしてきた。</p> <p>学校では、字を書いても読んでももらえないこと、絵を描けないこと、階段の昇降が大変であった。一度、特別支援学校に転校して生活のスキルを身に付けた後、通常の学校に戻り、最終的に大学院まで修了した。</p> <p>怪我のため大好きなスポーツができなかった8年間を経て、パラアスリートのスカウトに参加し、陸上競技選手としてスポーツを再開した。バランス強化のトレーニングも耐え抜き、スターティングブロックを使った練習や、階段も一人で下りられるようになった。</p> <p>ゲルト・ヤン選手は、「可能性を信じて機会を作ってくれた両親、チームコーチに感謝している」と話した。</p> <p>障害者のスポーツをサポートする立場のヘレーン氏は、ゲルト・ヤン選手のスカウトやコーチングや、障害者自身が乗れないとあきらめていたスノーボードを可能にしてきた。</p> <p>高校生に向けては、「いつも自分を信じてあきらめない気持ちを持ってほしい。」また、「誰か少し違う人を見かけた時に変な人だと思わないで、一緒にスポーツを</p>

	<p>楽しむ機会を作ってほしい。」と話した。</p> <p>◆スポーツ交流</p> <p>ゲルト・ヤン選手とランニングやサッカーを行い（文華女子高校）、ヘレーン氏と一緒にスポーツ車いすに乗ってさまざまな動かし方の体験や、リレーなどを行った（文華女子高校、田無工業高校）。</p> <p>ひばりが丘児童センターでは、フットサルやバドミントンなど子どもたちと一緒に楽しんだ。</p> <p>◆ボッチャのランプ製作のプレゼンテーション（田無工業高校）</p> <p>田無工業高校の「歩く建築同好会」が取り組んでいる、ボッチャで使用する競技用補助具のランプの製作活動について、オランダ側へ紹介した。</p> <p>工業高校と特別支援学校の生徒がボッチャのランプの提供や、使用した感想や意見を聞いて改良する取組に対して、オランダ側からは、自然なコミュニケーションが生まれていること、継続的な取り組みとなっていることが評価された。また、田無工業高校内の様々な技術製作に関心を示し、その他のパラスポーツやインクルージョンにするための用具などを製作し、活動を展開するアドバイスをいただいた。</p>
<p>参加人数</p>	<p>文華女子高校 講演会 1～3年生約 300 人、交流 1年生 25 人、2年生 25 人</p> <p>田無工業高校 94 人</p> <p>ひばりが丘児童センター 約 20 人</p>



事業名	2019 ともに生きる！まちづくりフェス
日時	令和元年 11 月 23 日（土）午前 9 時 30 分から午後 4 時まで
場所	コール田無
参加人数	ワークショップ：中学生から高校生まで約 50 人 スポーツ交流：約 40 人
概要	子どもから高齢者まで、障害のある方もない方も、皆がつながり、ささえあい、誰もが住み慣れたまちで暮らし続けられるよう、地域共生社会の実現を考えるイベント
内容	<p>◆ワークショップ</p> <p>オランダで実践しているみんなで一緒にスポーツをすることの大切さを話した。オランダの考え方は、支援者が勝手に判断せず、相談者に寄り添うコミュニケーションを取りながら、「一緒にいることが共生社会」であると紹介した。</p> <p>ヘレーン氏は、パラアスリートエキスパートとして「いろいろなバックグラウンドを持った人たちと一緒に楽しむことや、特別な個性のある人の能力を探り合うことを楽しんでいる。」と話し、それによってみんながアクティビティに参加できるようになると紹介した。</p> <p>スポーツだけでなく、障害者、高齢者、子供などに応用して、誰もが自分自身として受け止めてほしいと思っているので、一緒に考え、含めることがインクルージョンであると話した。</p> <p>◆スポーツ交流</p> <p>ボッチャ、卓球をアレンジした遊び、棒サッカーを行った。</p> <p>障害福祉団体、市内高校の国際交流委員会、庁内の福祉関連部署など様々な分野の人がオランダ人と情報交換や、スポーツ交流を行った。</p>



3 来年度の来日活動について

5月頃と、秋頃（10月、11月頃）の合計2回（予定）